



TITLE:

彙報

AUTHOR(S):

CITATION:

彙報. 人文學報 2001, 85: 183-205

ISSUE DATE:

2001-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/48579>

RIGHT:

彙 報

2000年（平成12年）1月～2000年（平成12年）12月

研 究 状 況

I 班 研 究

人文学研究部

帝国の研究

班長 山本有造

冷戦の終了、ソ連邦の崩壊とともに、諸民族・諸地域の間に遠心力が強まり、民族とは何か、国家とは何かがいま新たに問われはじめている。「民族自決に立脚した国民国家」という近代的理念の妥当性が再検討されるなかで、「帝国」という国家統合のあり方についても、改めて科学的分析が要求されつつある。

われわれの共同研究会においては、これまでの「マルクス主義的経済帝国主義」論にとらわれることなく、世界史的かつ長期的な比較の立場に立って、「帝国」の原理と類型を整理・検討しようとする。

研究会は原則として隔週月曜日に開催し、平均2つの報告と討論を行っている。

なお、当初2年間の予定を1年延長し、現在報告書作成に入っている。

班員 籠谷直人 菊地暁 小牧幸代 張啓雄 水野直樹 山室信一 安田敏朗 ルイーズ・ヤング（以上所内） 杉山正明（文学研究科） 秋田茂（大阪外大） 今田秀作（和歌山大） 王柯（神戸大） 杉原薫（大阪大） 山本正（大阪経済大）

1月24日 報告 アジアにおける国民国家システムの形成について 杉原

書評 エマニュエル・トッド『移民の運命－同化か隔離か』藤原書店 安田

2月14日 報告 英領インドの地方行政－連合州西部C町の条例集（1928）から読みとれること－ 小牧
報告 研究会二年目を終るにあたって－まとめと提案－

山本有造

4月10日 報告書作成に向けての検討会

全員

4月24日 報告 ヨーロッパ近世の帝国について 山本正

論評 横手慎二「帝国崩壊後の国家」（富田広士・横手慎二編『地域研究と現代の国家』慶應大学出版会、1998年所収）をめぐって

山本有造

5月8日 報告 帝国と民族－国民帝国の定義に向けて－ 山室

報告 16-18世紀におけるヨーロッパの国際秩序について 杉原

5月22日 報告 帝国支配と多言語性 安田
報告 ウォーラーステインの「世界システム」論に「帝国」論はあるか

籠谷

6月12日 報告 「帝国」史の脈絡－モデル化への試み－ 杉山

論評 三瀬利之「帝国センスから植民地人類学へ」『民族学研究』64-4 小牧

6月26日 報告 ヒト・労働力の移動と「帝国」 水野

書評 鈴木董『オスマン帝国の解体－文化世界と国民国家－』ちくま新書 安田

- 7月10日 報告 グローバルヒストリーのフロンティア
 — Kenneth Pomeranz, The Great Divergence: Europe, China, and the Making of the Modern World Economy (Princeton, 2000) をめぐって—
 杉原
- 書評 Karen Bakey and Mark Von Hagen eds., After Empire: Multiethnic Societies and Nation-Building: The Soviet Union and the Russian, Ottoman, and Habsburg Empires, Westview Press, 1997.
 山本有造
- 9月11日 報告 帝国と華僑ネットワーク帝国はいかに華僑を飼ったか?—
 籠谷
- 報告 ヘゲモニー国家と帝国—イギリス帝国と国際秩序—
 秋田
- 9月25日 報告 「帝国史」の脈絡：補遺 杉山
 書評 中生勝美編『植民地人類学の展望』（風響社、2000）—あるいは、人類学にとって帝国（の不在）とは何かを考える—
 菊地
- 10月23日 報告 中国における権力と「民族」—支配の正統性はどこから来たか—
 王
- 報告 帝国センサスとインド・ムスリム：連合州の場合
 小牧
- 安定社会と言語 班長 横山俊夫
 人間社会の安定化と言語の変質とのかかわりの諸相を、生物群集の研究者とともに多面的に解明する。素材にはアジアやヨーロッパの宗教史、芸能史、文学史、科学史上の事例をえらぶ。この課題をかかげるのは現代の科学技術が個としての人間を萎縮させ、地球規模の閉塞社会をもたらしはじめたなかで、それをあかるい安定社会に変えうるのは言語上の工夫ではないかとの想いからである。なお参考資料として、17世紀後半の日本の色道論を輪読、その言語の質を検討している。
- この研究は、話し言葉や名づけをめぐる試行的共同研究「言語力の諸相」（1997-98）や「新発見事物への名づけをめぐる学内共同のこころみ」（1998）の成果をふまえるとともに、京都ゼミナールハウス主催「京都国際セミナー／安定社会の総合研究」（1989-99）の蓄積を、さらに発展させることになるだろう。
- 班員 宇佐美齊 金文京 小林博行 武田時昌
 東郷俊宏 森本淳生 Thomas HARPER Gaye ROWLEY（以上所内）山極壽一（学内理学研究科）遊磨正秀（学内生態学研究センター）荒牧典俊（大谷大学）遠藤彰（立命館大学）加藤和人（JT生命誌研究館）後藤静夫（国立文楽劇場）廣瀬千紗子（同志社女子大学）深澤一幸（大阪大学）
- 1月22日 「自然文化環境」の評価への試み
 遊磨
- 『色道大鏡』巻五 廿八品第十六
 普属品～第十七 非常品 武田
- 2月5日 近世文芸の〈見立て〉について
 廣瀬
- 『色道大鏡』巻五 廿八品第十八
 大偽品 武田
- 2月19日 科学史から見たクローン実験（試論）
 加藤
- 『色道大鏡』巻五 廿八品第十九
 背世品 荒牧
- 3月4日 名づけの自然誌 —『国際動物命名規約』新版に見る動物命名法の現状と問題点
 西川輝昭氏（名古屋大学大学院教授）
- 5月6日 大津皇子「臨終一絶」について 金
 『色道大鏡』巻五 廿八品第十九
 背世品 荒牧
- 5月20日 島原〈角屋もてなしの文化美術館〉見学会
 解説：中川清生氏（角屋保存会理事長）
- 6月3日 患者と医者の間を彷徨う言葉 東郷
 『色道大鏡』巻五 廿八品第十九
 背世品 荒牧
 第廿 等賤品 宇佐美

- 6月10日 京都国際セミナー「安定社会の総合研究」最終報告書：『安定社会をみる／かたる』合評会 全員
『色道大鏡』巻五 廿八品第廿一 示道品～第廿二 顕徳品 加藤 班員 籠谷直人 菊地暁 高木博志 安田敏朗
- 6月17日 数の予言力 胎産の医療とまじない 山室信一（以上所内） 文竣英（外国人共同研究者）
武田 伊藤之雄（法学部） 駒込武（教育学部） 永井和（文学部） 堀和生（経済学部） 青野正明（桃山学院）
『色道大鏡』巻五 廿八品第廿三 抜粋品～第廿四 大秀品 後藤 浅井良純（大阪経済大非常勤） 桂川光正（大阪産業大） 河合和男（奈良産業大） 河原林直人（大阪市立大・院） 北波道子（関西大・院） 金英達（大阪市立大非常勤） 呉宏明（京都精華大） 近藤正己（近畿大） 杉原達（大阪大） 富山一郎（大阪大）
7月1日 動物生態学のことば ― 狩蜂をどう語るか ファーブルから現代をかすめる 遠藤 土井浩嗣（神戸大・院） 藤永壮（大阪産業大） 朴一（大阪市立大） 朴宣美（京大・院） 松田利彦（日文研） 松田吉郎（兵庫教育大） 山田敦（学術振興会特別研究員） 李卓（京大・研修員）
7月15日 心をのぞく窓：動物の行動を記述する言葉 山極
10月21日 KUGEFICATIONについて 横山
『色道大鏡』巻五 廿八品第廿五 玄妙品 東郷
10月28日 鄭孝胥と漢学者たち 深澤
『色道大鏡』巻五 廿八品第廿六 極盡品 金 金英達
11月18日 『色道大鏡』学事始 ― 親鸞と道元の開いたもの ― 荒牧
『色道大鏡』巻五 廿八品第廿七 明了品 廣瀬
12月2日 安藤昌益と言語 小林
『色道大鏡』巻五 廿八品第廿八 大極品 横山
12月9日 近世初頭の芸評のことば ― 重層と省略 ― 廣瀬
『難波鉦』概観 森本
12月16日 公開研究会・野生鳥類の保護
― アホウドリに安住の地を ― 伊藤之雄
長谷川博氏（東邦大学理学部助教授）
企画・司会：遠藤，横山
- 6月19日 台湾と満州国の衛生医療 沈 潔
日本統治下の朝鮮戸籍簿を読む―いくつかの戸籍謄本を実例にして―
- 2月2日 日清戦後台湾における日本現行条約の実行と台湾樟脳について 黄 紹 恒
『神社協会雑誌』の植民地神社関係記事 高木博志
- 2月16日 “Postwar Studies of Colonial Korea: with a focus on the early 1950’s to mid-1960’s”
Kristine Dennehy
山県系官僚と朝鮮・台湾―寺内正毅文書・山県有朋文書の書状を素材に―
伊藤之雄
- 3月1日 柳原吉兵衛研究―戦前大阪周辺地域における「内地植民地ミッション」の台頭― 朴 宣 美
本年度のまとめ 水野直樹
- 4月19日 「皇民文学」から見る台湾知識人の意識 ―「奔流」「志願兵」「道」を中心として― 張 修 慎
宮田節子監修『末公開資料 朝鮮総督府関係者録音記録（1）』によせて
- 日本の植民地支配 ― 朝鮮と台湾 ―
班長 水野直樹
日本の植民地支配の全体像を解明することをめざして、朝鮮と台湾における植民地政策の比較、日本の政治・経済・社会などとの関連に重点を置いて、

- 田中隆一 明治維新期の社会と情報 班長 佐々木 克
- 5月17日 台南長老教中学神社参拝問題 駒込 武 明治維新期は、おおまかに幕末の旧体制崩壊期と、
日月潭水力電源開発と台湾工業の始動 北波道子 明治の新国家建設期とに二分できる。しかし何れに
6月7日 一九二〇年代における朝鮮総督府の勸 農行政機構―「産米増殖計画」と朝鮮 農会令― 土井浩嗣 社会は流動化し人が激しく動き、そして噂・流説な
日本統治時代の台湾の農業講習所につ 松田吉郎 どさまざまな情報が飛びかう。そこで、権力も組織
6月21日 「蕃童教育所」普及過程における台湾 先住民社会の変容 北村嘉恵 も人も、情報を求め、必要とし、かつ自らも発信し
書評：河合和男他共編著『国策会社・ 河原林直人 てゆく。幕府や藩当局は、それぞれ独自の情報蒐集
東拓の研究』 植民地末期の朝鮮における言語政策 川寄 陽 システムを持っていた。しかし伝統のシステムだけ
7月19日 植民地期台湾財界ネットワークに関する調査 1935年―兼任役員の構成を通して― 籠谷直人 では、新たな状況に対応出来なくなる。また幕府は
10月4日 植民地台湾における公娼制度―朝鮮と 藤永 壮 政治や外交に関しては、情報統制を基本としてきた
の比較― 植民地期朝鮮における民族別工場の統 河合和男 が、それが崩れて行く。そうしたなかで、知識人や
計的検討 河合和男 在村のエリート達が、独自のネットワークをもって、
10月18日 朝鮮総督府編纂『訂正修身書』について―過渡期の教育方針に関する一考察― 本間千景 情報の蒐集・発信主体として登場し、権力の側は、
琉球大学付属図書館「矢内原忠雄文庫」 河原林直人 彼らの存在を無視できなくなる。こうした状況は基
11月1日 朝鮮寄留令の制定・実施（1942-43年） 水野直樹 本的には、明治期に引き継がれるが、新たな問題も
について―植民地住民登録制度の最終 菊地 暁 登場する。それは明治政府が、権力が内包する根源
段階― 紹介：植民地期朝鮮・台湾の人類学・ 民俗学 青野正明 的病として、情報を秘匿・隠匿しようとする基本的
11月15日 朝鮮総督府の墓埋政策と墓地風水 ー1920年代までを中心にして― 青野正明 性格を維持しながら、一方で、政府は民衆に伝えな
12月6日 朝鮮植民地支配と天皇恩赦大権 田中隆一 ければならない情報を、如何に早くかつ広く伝達・
張文庫（山口県立図書館）について やまだ あつし 徹底させるか、すなわち情報公開という重要な課題
2月4日 近代における神話の古代の創造 高木博志
3月3日 維新政府の外交政策―樺太問題と朝鮮 問題の関連について― 麓 慎一

4月28日	尺振八・乙骨太郎乙とその周辺ー明治期における旧幕臣社会ー	鈴木栄樹	センター) モール・亀谷百合佳(同志社大学言語文化教育研究センター) 河原林直人(龍谷大, 帝塚山大非常勤) 田中隆一(大阪大学文学研究科)
5月12日	東京遷都を考える	佐々木克	鶴見太郎(京都文教大学) 早瀬晋三(大阪市立大学文学部) 本間千景(仏教大学文学研究科)
5月26日	安政五年直弼上洛説と池田愿同	母利美和	溝口歩(神戸大学総合人間学科) 盛田良治(大阪産業大学非常勤)
6月16日	近代日本の追悼空間について	原田敬一	第1回 4月14日
6月30日	山本芳翠《十二支》について	高階絵里加	山室信一 研究会のテーマと研究目的について
9月8日	彦根藩の相州警備(岸本覚)		第2回 4月28日
9月22日	戊辰戦功と賞典禄	落合弘樹	山室信一 文化連関の政治力学ー文化交流と文化工作をめぐってー
10月6日	明治期京都の講談と講談席	福井純子	坂部晶子 書評: 蘭信三編『「中国婦国者」の生活世界』
11月10日	老農中村直三と情報	谷山正道	第3回 5月12日
11月24日	京都留守居と政治情報ー鳥取池田家と安達清一郎を素材にー	笹部昌利	籠谷直人 1930年代後半の日本政治と東亜研究所の設立
12月15日	『海南政典』と幕末の土佐藩	羽賀祥二	竹沢泰子 エスニシティからみた文化連関ー日本人から日系アメリカ人へー
文化相渉活動の諸相とその担い手 班長 山室信一			第4回 5月26日
本研究は複数の社会空間をまたがる文化の出会いと繋がり,そして反発・摩擦などの諸相を分析,そこから地域文化と世界文化の編製の意義を探ることを課題として出発し,文化連関という研究分野と分析枠組の創出をめざしている。この文化連関学とでもいうべき領域のデザインをいかに描くかを求めて,既存の学問分野や理論がいかなるものであり,また何がフロンティアとしてありうるのかについて検討を進めることが当面の課題となる。そのため,本年度は班員の専門や研究対象についてその達成と問題点を報告したうえで,新分野の可能性について議論を重ねた。			籠谷直人 平沼内閣期以降の政治と東亜研究所
また,この共同研究では,文化相渉活動の担い手としての学術調査機関やシンクタンクによって集積された情報を分析していくことも重要な課題として設定しており,東亜研究所について基礎的史料の整理とその分析結果の報告も併せて行った。			高階絵里加 バリ時代の山本芳翠
班員 落合弘樹 籠谷直人 菊地暁 小林博行 高木博志 高階絵里加 瀧井一博 竹沢泰子 張啓雄 安田敏朗 山本有造 ルーズ・ヤング(以上所内) 及川英二郎 坂部晶子 承志(以上文学研究科) 加藤雄三(法学研究科) 蘭信三(留学生			第5回 6月9日
			坂部晶子 「満洲」経験の歴史社会学的考察ー「満洲」同窓会の事例をととしてー
			田中隆一 帝国日本の司法連鎖
			第6回 6月23日
			ティモシー・ツー(シンガポール国立大) 墓碑文に見られるシンガポール日本人社会ー死者のアイデンティティと埋葬の義務を中心にー
			早瀬晋三 領事報告の使い方ーフィリピンの事例ー
			第7回 7月14日
			瀧井一博 カール・ラートゲンードイツ・ヴィッセンシャフトの伝道者ー
			張 啓 雄 戦後台湾海峡兩岸における名分秩序交渉ーアジア開発銀行の代表権をめぐってー
			第8回 9月22日
			加藤雄三 東亜研究所第六調査委員会について
			溝口 歩 済南事件と英領マラヤ・シンガポール

人 文 学 報

華僑の排日運動—ゴム事業関係者を中心として—		るのではなく、日本・中国・ロシア・アメリカ・その他の諸国との比較対照の視点をも重視しなければならない。研究会は3年半にわたって原則として隔週に開催し、口頭発表と討議とを積み重ねてきたが、最終年度に当たる2000年秋には報告書のすべての論文執筆を終え、すでに原稿検討会を経て編集作業に入っている。2001年秋には京都大学学術出版会から『アヴァンギャルドの世紀』と題して刊行されるはずである。	
第9回	10月13日	班員 井波陵一 大浦康介 森本淳生 (以上所内)	
菊地 暁	柳田民俗学の起動と転移—同時代史としての奥能登のアイヌコト—	篠原資明 松島 征 三好郁朗 (以上総合人間学部)	
鶴見太郎	戦時下に於ける柳田民俗学の組織化—古希記念事業を中心に—	吉田 城 (文学部) 鈴木貞美 (国際日文研)	
第10回	10月27日	丹治恆次郎 (関西学院大学法学部) ピエール・ドゥヴォー (甲南女子大学文学部) 水田恭平 (神戸大学国際文化部) 永田 靖 (大阪大学文学部) 禹朋子 (帝塚山学院大学文学部)	
本間千景	朝鮮総督府編纂『訂正修身書』について—過渡期の教育方針に関する一考察—	2000年	
安田敏朗	近代日本言語史の諸論点	1月24日	20世紀音楽と avant-gardisme
第11回	11月10日	ドウヴォー	
ルイーズ・ヤング	日本の総合帝国—満州と戦時帝国主義の文化—	2月21日	モンタージュを考える 永田
落合弘樹	アジア情報と『評論新聞』	3月13日	ブルーストからポール・モランへ
第12回	11月24日	吉田	
高木博志	世界遺産と日本の文化財保護史—御物・陵墓の非国際性—	4月22日	原稿検討会 (吉田, 森本) 全員
Kevin Michael Doak (イリノイ大学)	文化の創作: 民族研究所と現在日本文化の条件	5月15日	原稿検討会 (丹治, 禹) 全員
第13回	12月22日	5月27日	原稿検討会 (大浦, 宇佐美) 全員
蘭 信 三	満州移民, 中国残留婦人, そして中国帰国者—「満州」と日本を問いつけるひとたち—	6月12日	原稿検討会 (井波, 松島) 全員
及川英二郎	戦中・戦後の社会運動—「労使関係」・「家庭」・「帝国」をめぐる—	6月24日	原稿検討会 (水田, 永田) 全員
アヴァンギャルド芸術の研究 班長 宇佐美 齊		7月3日	原稿検討会 (Devaux (森本訳), 篠原) 全員
1997年から2001年にいたる4年間の予定で発足した共同研究班である。		9月9日	原稿検討会 (Bayard (大浦訳), 宇佐美序文) 全員
20世紀初頭において芸術概念と表現理論とを大きく転換させた, いわゆるアヴァンギャルド芸術を今日的な視点から総合的に再検討することを主眼とする。その場合, 文学・美術・音楽・演劇・映画など諸ジャンル相互間の関わり, 科学技術の進展, また政治経済や社会の変動が及ぼした影響, そして思想的なコンテクストなどに留意しなければならないことはもちろんであるが, 同時にこの運動においては世界的な並行現象ないしは波及効果が見られる点を充分に考慮して, 西ヨーロッパのみを視野に収め		9月23日	シュルレアリスムとアヴァンギャルド 三好郁朗
		10月10日	編集作業 宇佐美・大浦・森本・禹
		10月24日	編集作業 宇佐美・大浦・森本・禹
		11月13日	編集作業 宇佐美・大浦・森本・禹
		11月27日	編集作業 宇佐美・大浦・森本・禹
		12月4日	編集作業 宇佐美・大浦・森本・禹
		12月18日	編集作業 宇佐美・大浦・森本・禹
		空間と移動の社会史 班長 前川 和也	

ヨーロッパ、東アジア、西アジアの前工業化社会を中心として、人、もの、情報の移動の実態、そのような移動をひきおこした歴史状況、移動を規制するシステム、移動にともなう空間認識の変化などの問題を議論してきた。われわれは、伝統的社会を閉ざされた空間とみる立場をとらない。今年度は、具体的には、移住がひきおこす諸問題（近世英国の移民と植民地、近世フランス、ロシア、現代バルト諸国、アメリカ移民とエスニシティなど）、巡礼者、旅行者の目（聖地巡礼、モンテニューなど）あるいは異文化へのまなざし（西欧人の西アジア観）、広域的な商業交易空間（英国、スペイン、デンマーク）、兵士の移動（近世ドイツ）、社会体制と宗教ネットワーク（近世英国、ドイツなど）、中世国家の統治システムと空間（英国、イタリア）などのトピックが議論された。また今年度は研究班の最終年にあたっており、2002年に報告書を公刊するための作業をすでに開始している。

班員 前川和也 小山哲 阪上孝 田中雅一 富永茂樹 横山俊夫（以上所内） 南川高志 服部良久（以上文学研究科） 川島昭夫（総合人間学部） 阿河雄二郎（大阪外国語大） 井上光子（関西学院大） 井上浩一 大黒俊二（以上大阪市大） 江川温 川北稔（以上大阪大） 川本正知（奈良産業大） 合田昌史（甲南大） 渋谷聡（島根大） 高田京比子（神戸大） 田中俊之（金沢大） 河村貞枝 橋本伸也 渡邊伸（以上京都府大） 三成美保（摂南大） 山辺規子（奈良女子大） 森明子（国立民博） 脇田晴子（滋賀県大） 桜井康人（京大文・研修員） 中村敦子（京大文・特別研修員）

1月18日 ロシア・ディアスポラ？ バルト3国の民族問題とEU拡大 橋本

1月25日 移動する「社会」 30年戦争における「宿営社会」の現実 渋谷

4月18日 ボデスタの世界 13世紀中・北部イタリアのネットワーク 山辺

4月25日 ロンドンが結んだ世界 1635年の出国者調査 川北

5月 9日 聖ウェルバラ修道院とチェスター伯家 中村

5月23日 18世紀デンマーク王国の海外貿易 デ

ンマーク王国の貿易会社と6つの海

井上光

6月 6日 信ずべきことはわからぬけれど 再洗礼派とシュトラースブルク市領域教会 渡邊

6月20日 ヒトの移動と人種の境界 「アジア系アメリカ人」をめぐって 竹沢泰子（人文研人文学研究部）

7月 4日 十字軍説教師と十字軍 マルティン・フォン・バイリスの「巡礼」 桜井

9月12日 われわれもまたインドに至らん 近世ポーランドにおける「新世界」認識とウクライナ植民論 小山

9月26日 「啓蒙の時代」のプロテスタント国際主義 西川杉子（神戸大）

10月10日 16世紀におけるフランス国家と暴力 D.クルーゼ（パリ第4大）

10月17日 オリエンタリズムとジェンダー 啓蒙期西欧女性のハーレム見聞記をめぐって 三成

10月24日 航海者マゼランの空間と移動 合田

11月 7日 中央アジアのチュメン（「1万」）なる地域区分について 川本

11月14日 中世末期フランス貴族の聖地巡礼 江川

11月21日 モンテニュー『旅日記』をめぐる諸問題 宮下志朗（東大総合文化研究科）

12月 5日 商人とは何か 時間と空間からの考察 川分

12月12日 近世フランスの外国人 阿河

12月17日 ベルナルディーノの頭蛇袋 空間と移動の思想史 大黒

テキストの政治学－危機の時代における理論と批評－

班長 上野成利

20世紀の前半期は、近代的な人間諸科学の「危機」が表面化し、その克服をめぐる言説がさまざまな領域で浮上していった時代であった。しかしこれらの言説には、近代みずからが自己自身のありようを批判するという屈折した自己意識が、きわめて先鋭的なかたちで表現されているといってもよいだろう。

こうしたテキストのねじれを解きほぐしながら、それらの言説に刻印された近代的な思考の回路を明らかにし、それが近代社会のありようとどのように絡み合っているのかを検証すること——これが本研究班の基本的なねらいである。今年度も前年度までと同様、さまざまな領域のテキストを取り上げ個別に検討を加えたが、さらに照準を「1930年代・日本」に絞り込み、いくつかの先行研究のパラダイムの整理・検討をも試みた。目下のところ、共同研究全体を包括的に方向づけるような、理論的枠組みの構築に努めているところである。

班員 落合弘樹 菊地 暁 北垣 徹 小林博行 小牧幸代 瀧井一博 森本淳生 安田敏朗（以上所内）田辺明生（アジア・アフリカ地域研究科）飯田祐子（神戸女学院大）岡 真理（大阪女子大）崎山政毅（神戸市外大）田崎英明（立命館大）辰巳伸知（仏教大）常田夕美子（日本学術振興会）細見和之（大阪府立大）水嶋一憲 盛田良治（以上大阪産業大）

- | | | |
|--------|--------------------------|-------|
| 1月30日 | 竹内好と武田泰淳 | 三宅 |
| 2月19日 | 島恭彦の東洋社会論 | 盛田 |
| 3月14日 | 九鬼周造『『いき』の構造』 | 上野 |
| 3月25日 | 九鬼周造『日本詩の押韻』 | 君野 |
| 4月12日 | 竹内好「近代の超克」 | 菊地／小林 |
| 4月15日 | 「1930年代」論の諸相 | 上野／細見 |
| 5月20日 | ヴィットゲンシュタインとオーストリア1930年代 | 國重 |
| 5月31日 | 大杉栄の生命観と社会観 | 上野／小林 |
| 6月24日 | 近代における古都の政治文化 | 高木 |
| 7月5日 | 共同研究「転向」論（1） | 菊地／安田 |
| 7月22日 | 30年代前後における女性作家 | 飯田 |
| 7月25日 | 共同研究「転向」論（2） | 盛田 |
| 9月23日 | 昭和初期写真論を読む | 菊地 |
| 10月25日 | ベンヤミン「写真小史」を読む | 森本 |
| 10月28日 | 唯物論研究会とその周辺 | 崎山 |
| 11月22日 | 中井正一の複製芸術論を読む | 上野 |
| 11月25日 | 日本浪漫派、その発端の多様性 | 細見 |
| 12月23日 | 1930年代 日本社会学の位相 | 辰巳 |

サーマヴェーダ基礎資料集成 班長 藤井 正人
ヴェーダ文献の中で祭歌歌詠を内容とするサーマ

ヴェーダの文字資料を統一的に整理し編集することによって、サーマヴェーダの基礎資料を集成することがこの共同研究の目的である。未出版のジャイミニヤ派サーマヴェーダの各種写本を中心に研究を進めるが、他派の伝承をも対象に含める。文献学、祭式学、音楽学をそれぞれの専門とする研究者の国際的な協力のもとに行なうサーマヴェーダの総合研究の第一段階として、サーマヴェーダ全体の総索引の出版を当面の目標としている。研究形態は、各班員が資料の担当を分けて行なう分業と、班員間の作業の調整と内容の検討を行なうミーティングの二つからなる。この研究班はサーマヴェーダに関する専門知識を次世代に伝えることも意図しているので、若い研究者を班員に加えている。研究成果の一部として、サーマヴェーダの現存伝承と基礎資料に関する予備的な目録を作成した。

班員 井狩彌介（所内）永ノ尾信悟（東京大）アスコ・パルボラ（ヘルシンキ大）ウェイン・ホワード 梶原三恵子（ハーヴァード大・院）野田智子 村川晶子（以上京大・院）

ポルノグラフィー研究

ーエロスとその表象をめぐるー

班長 大浦 康介

本研究は、文学テキスト、絵画、写真、映画、ビデオ、コミックなど、さまざまな媒体をつかった性表象の分析をつうじて、エロスの内実とその表象可能性や、それらの表象を横断する〈主体〉、〈社会〉、〈民族〉、〈国家〉、〈性差〉、〈宗教〉、〈倫理〉などの問題を考えることを目的とする。近代ヨーロッパにおける「ポルノグラフィーの発明」をひとつの目安として、日本近現代の性表象・性文化や中国、アメリカの事例などを検討しつつ、この分野での新たな理論的地平を模索したい。期間はさしあたり3年間。原則として月2回の会合をもつ。

班員 北垣徹 金文京 田中雅一 東郷俊宏（以上所内）小西嘉幸（大阪市大）小山俊輔（奈良女子大）関谷一彦（関西学院大）棚橋訓（慶應義塾大）早川聞多（日文研）古川誠（関西大）山路龍天（同志社大）山本和明（相愛女子短大）小野原教子 河田学 山口威（以上京大）

- 人環・院) 片平幸 渡辺綾香(以上総研大・院) 作成する作業をつづけ、去る2000年3月に予定して
川村清志(学振特別研究員) 北原恵(東大・院) いたすべての翻訳が完了した。これらのテキストの
下野理恵(大阪国際女子大・非) 藤本純子(阪 読解から明らかになったのは、近代市民社会の誕生
大・院) 圓田浩二(関西学院大・院) の瞬間に、市民の権利と義務、所有、社会的結合な
どさまざまな問題をめぐって動員され、衝突しあい、
2月2日 服か身体か — ヴィヴィアン・ウェス 小野原 さもなくばすれ違う言説と観念のダイナミズムであ
トウッドの方法 る。これらの成果は近日中に資料集のかたちでまと
2月16日 ネットのなかのフェティシズム — 耳・ 川村 められ、当研究所の刊行物として公表されることに
脇・乳・足 になっている。
3月1日 女給物語の文法 — 林芙美子『放浪記』 渡辺 班員 北垣 徹 阪上 孝(以上所内) 前川真
をめぐって 3月15日 フリー・トーク(日本とオーストラリ 行(大阪女子大) 白鳥義彦(椋山女学園大) 岡崎宏
アの性の現場から) 樹(京都学園大) 宇城輝人(京大研修員) 佐藤吉幸
北原みのり(ゲスト) (京大経済・院)
4月19日 精子の表象 — 男性アイデンティティ 1月14日 8月26-27日討議 白鳥/前川
の構築と〈危機〉 北原 2月18日 ジャコバン主義と恐怖政治
5月17日 エロティシズムとは何か 関谷 パトリス・ゲニフェー
6月7日 ラカンからポルノグラフィーを考える (ゲスト 社会科学高等研究院)
小山 2月25日 マラー案 前川/宇城
7月5日 Sexualised “Cuteness” in Japanese 3月3日 マラー案 佐藤/前川
Popular Culture 3月10日 マラー案 佐藤/前川
Brian J. McVeigh(ゲスト・東洋学園大) 3月24日 タルジェ案 白鳥/宇城
10月18日 フィクションとしてのポルノグラフィー 河田
11月1日 女子プロレスにおけるヴィジュアル・ 班長 井狩 彌介
パフォーマンスについて — コスチュ 南アジアのような多言語社会においてリンガフラ
ームを中心に 小野原 ンカ(共通語)としてのサンスクリットのテキスト
11月15日 ポルノグラフィーを考えるための八つ 伝承を扱う場合、伝承の過程において生じる時間的
の問題提起 人浦 要因(言語体系の歴史的変遷)と地域的要因(テク
12月6日 国家に抗する性の博物館 — 秘宝館探訪 ストが伝播される各地域での地方語音韻の影響と写
中間報告 田中 本表記文字の相違)とによるテキスト変容の可能性
12月20日 「離脱」のエロティシズム — 「進化」す は重要な検討課題となる。本研究では、ヴェーダ文
る性、S M ボーイズ・ラブをめぐっ 献の伝承、特に南インド・ケーララ地域の写本と口
て 藤本 頭伝承資料に焦点をあて、ヴェーダ文献伝承の諸特
徴を分析しつつテキストの批判刊本を作成するため
1789年人権宣言成立過程の研究 班長 富永茂樹 に必要な前提知識を総括してきた。この分野の研究
この共同研究は「人間と市民の権利の宣言」の成 史の未開拓な現状を考慮して、本研究では諸写本を
立過程を詳細にたどりつつ、そこに現れた市民の概 写本特徴により分類し、それらの歴史的変遷を確定
念を検討することを目的としている。そのための手 するための基礎資料を提示することに重点を置いた。
がかりとして、1789年に議会の内外で発表された数 班員 荒牧典俊 藤井雅人 アスコ・パルボラ
多くの人権宣言草案のうち、著者や内容の点で重要 (以上所内) 徳永宗雄(文学研究科) 村上昌孝(大
と判断されるテキストを選定し、その精確な翻訳を 阪外大・非) 山下 勤(京都学院大) 増田良介

人 文 学 報

(大阪外大・非) 矢野道雄 (京都産大) 梶原三恵子
(日本学術振興会) 野田智子 村川章子 (以上京大
文・院) 杉田瑞枝 (京大研修員)

「進化論」と社会

班長 阪上 孝

「進化論」的な思考様式は19世紀後半以降の社会
と学問の枠組みそのものに深く根を下ろしているとい
ってよいだろう。「進化論」がさまざまな社会と
学問分野でどのように理解・受容・批判されていっ
たのかを比較検討することで、近現代の社会・文化・
学問のありかたを、その問題性もふくめて明らかに
すること、これが本研究班の基本的なねらいである。

二年目を迎えた今年度も前年度と同様、狭義の進
化学説の文化的・社会的な含意が探索されるととも
に、哲学・法学・経済学・社会学・人類学といった
人文・社会科学分野にみられる進化論的な思考の諸
相が検討の俎上に載せられた。また、生物学の専門
研究者をゲストに招いて、遺伝学・発生学やゲノム
研究にかんする知見を深める機会をもうけたり、霊
長類学の専門研究者を招いて、人類進化と社会形成
の関係について再検討することも試みた。こうした
一連の検討作業においては、たとえば「進化論」に
ふくまれる〈進化〉の問題系と〈集団〉の問題系と
の錯綜などが、あらためて議論的ともなった。次
年度は最終年度となるので、研究報告書の作成を見
据えながら、報告と討議を深めてゆく予定である。

班員 上野成利 北垣 徹 小林博行 小山 哲
瀧井一博 竹沢泰子 武田時昌 田中雅一 富永茂
樹 山室信一 (以上所内) 大澤真幸 (人間・環境学
研究科) 大東祥孝 (留学生センター) 八木紀一郎
(経済学研究科) 宇城輝人 (京大研修員) 小川眞里
子 (三重大) 川越 修 (同志社大) 小林清一 (滋賀
県立大) 斎藤 光 (京都精華大) 佐倉 統 (横浜国
立大) 白鳥義彦 (椋山女学園大) 姫野順一 (長崎大)
前川真行 (大阪女子大) 光永雅明 (神戸市外大) 横
山輝雄 (南山大)

1月21日 分子遺伝学と決定論

西川伸一 (医学研究科)

2月4日 進化と発生—ヘッケルを超えて

倉谷 滋 (岡山大)

4月28日 進化論と人文・社会科学

阪上

5月12日 ゲノム研究と生物の進化

加藤和人 (J T生命誌研究館)

5月26日 歴史法学から進化学へ 瀧井

6月9日 丘浅次郎の進化論と社会論 上野

6月23日 親族制度 (研究) の進化 田中

7月14日 グンプロヴィチの社会学体系 小山

9月24日 19世紀末アメリカ人類学と進化 竹沢

10月13日 進化論における「社会」の概念

黒田末寿 (滋賀県立大)

10月27日 石川千代松『進化新論』再考 斎藤

11月10日 クロボトキンと社会 前川

11月26日 進化経済学の現在 八木

12月8日 20世紀における進化論 横山

フェティシズム研究の射程

班長 田中雅一

本研究会は『儀礼的暴力の研究』『主体・自己・
情動構築の文化的特質』に続くもので、ものとそれ
に関わる人との関係をテーマとする。フェティシズ
ムあるいはフェティッシュをキーワードに文化横断
的かつ領域横断的に議論を展開していきたい。ここ
でのアプローチは宗教学、経済学、歴史学、精神分
析、性科学、フェミニズム研究、物質文化論など多
岐にわたる。今年は主として主要関連文献について
の報告を行った。

班員 菊地暁、小牧幸代、大浦康介、阪上孝、高
木博志、竹沢泰子 (以上人文研)、速水洋子 (東南
アジアセンター)、足立明、田辺明生、保坂実千代
(以上AA地域)、松田素二 (文学研究科)、荻野美
穂、川村邦光、春日直樹 (以上大阪大学)、中谷文
美 (岡山大学)、岡田浩樹 (甲子園大)、窪田幸子
(広島大学)、齊藤光 (精華大学)、佐伯順子 (帝塚
山学院)、崎山政毅 (神戸外大)、細谷広美 (神戸大)、
箭内匡 (天理大学)、川村清志 (人文研特別研究員)、
金谷美和、常田夕美子、中谷純江 (以上人文研研
修員)、下野理恵 (同志社大学大学院アメリカ研究
所)、後藤正憲 (大阪大学大学院人間科学研究科)、
藤本純子 (大阪大学大学院文学部)、池亀彩、石井
美保、岩谷彩子、佐藤知久、島蘭洋介、松嶋健
(以上京都大学大学院人間・環境学研究科)

第1回4月17日

田中雅一 「問題提起と趣旨説明」

第2回5月15日	春日直樹 「はじめの一步 —『M.タウシグ、南米の悪魔と商品フェティシズム』から」	五月二二日	考察 インド後期佛教石窟と三つの王朝(三)	大原 嘉豊 定金 計次
第3回6月19日	中谷文美 「Arjun AppaduraiのThe Social Life of Things (モノの社会的生), 序章を読む」	六月 五日	道教における地獄救済の図像学 —伝梁楷『黄庭経図巻』考—	林 聖智
第4回7月3日	春日直樹 「商品・美・主体」	六月一九日	張仙図考	西上 実
第5回10月16日	田中雅一 「ゴドリエ『贈与の謎』(法政大学出版局)をめぐる」	七月 三日	正倉院琵琶捍撥画『狩獵宴楽図』試論	白 適銘
第6回11月6日	箭内 匡 「マゾヒズムとフェティシズム —G.ドゥルーズ『マゾッホとサド』をめぐる」	九月二五日	「象形」と「賦彩」—敦煌壁画を手がかりとして—	宇佐見文理
第7回11月20日	菊地 暁 「民具・民俗資料・民俗文化財」	一〇月一六日	北朝中原地区の須達拏本生図の研究	謝 振発
第8回12月4日	阪上 孝 「フェティシズム概念の誕生」	一〇月二三日	唐新城公主墓における仕女図についての考察—配置・図像の面から—	傳 江
第9回12月18日	山口恵理子 (筑波大学)「乳房という出来事 —ギリシアのタマをめぐる」	一〇月一三日	敦煌莫高窟三二三窟の研究	西林 孝浩
		一二月 四日	孝子伝図について—南北朝時代を中心に—	河野 道房
			譯經僧傳研究	班長 桑山 正進
			經典漢譯に參畫したインド僧に關する情報は『高僧傳』『續高僧傳』『宋高僧傳』などの冒頭に掲載されている譯經僧傳である。これらの傳記を班員の専門分野である歴史、言語、宗教、美術など多角視点をもって讀解検討し、4世紀～8世紀の、中央アジアから南アジアにわたる地域の歴史、文化、その他おおくの情報を引き出すことを目的とし、據るべき現代語譯を作成することをめざしている。研究會は隔週の月曜日(2時～5時)に文獻センター會議室で開催している。5年間にわたる共同研究ですべて讀了する計畫であつたが、建物改修工事による休會も半年あつたけれども、『高僧傳』だけ、しかもその三分の二を辛うじて終えたところである。	

東方学研究所

中国美術の図像学

班長 曾布川 寛

古代、中世の美術において表現されたものは全て象徴的意味内容を有しており、それが何を表しているかを知ることなしに作品の理解はあり得ない。作品の背景には神話伝説、宗教的義軌、社会的情況などがあり、それらを踏まえて理解することが要求される。我々は中国の古代、中世美術を取り上げるに当たり、図像学の見地から考察を試みる。主たる対象は考古学的出土文物と、石窟寺院などの佛教美術であり、中国のみならず、インド、朝鮮、日本を含めて考察する。

四月二九日 アンコール・ワットの拓本

山名 伸生

五月 八日 天寿国繡帳の図像に関する前提的

十六・十七世紀アジアにおける言語接触

班長 高田 時雄

本研究班ではポルトガル勢力のアジア東漸を契機として起こった言語接触の諸相を、ジェズイットを初めとするカトリック諸会派の資料を中心として解

明することを目指す。現在はマニラのドミニコ会が一五九三年に刊行したタガログ語版ドチリナを中心とし、同じくマニラ刊の中国語版、さらに日本キリシタン版、ポルトガル語版、スペイン語版、タガログ語版、ペルシア語版などを参照しつつ会読を行っている。班員の専門分野である言語・文学・歴史・宗教などの側面から討議・読解を行い、掘るべき現代語訳（日本語および英語）と詳細な注を作成することを目的とする。

中国技術の傳統

班長 田中 淡

本研究班は、「中国技術史の研究」班に引き続いて、一九九六年四月から五年間の計画で、中国の生活科学・技術を中心とする諸分野にわたり、その傳統と特質について検討を加えてゆきたい。さいわい前身研究班をつうじて、中国技術史における研究課題が臚げながら見えてきたので、必ずしも特定の時代、分野に偏重する必要はない。その關心の対象は、一般的には、前近代中国における技術と科学の相関、技術者と社会、生活科学技術の特質、少数民族技術にみる遺制、等々の課題に関わるであろうし、個別的には、医学・農業・土木建築・紡績・数学・天文学、その他あらゆる領域に広がるであろうと予想される。班員全員による会読のテキストとしては、前身班に引き続いて元・王禎の『農書』農器圖譜をとりあげ、その後半にあたる紡績関連の部分以降の譯注作成をすすめてゆく。それと並行して、技術史の諸分野にわたる班員の研究発表を随時おこなってゆく。標記の期間に、王禎『農書』農器圖譜・繅絮門を東郷俊宏、小林行、麻苧門を中原健二、山花戔夫がそれぞれ担当した。また左記の研究発表がおこなわれた。

二月 一日 唐長安城之CG復元—コンピュー
タ・グラフィックス併映—

王 才強

二月二二日 劉智『天方性理』初探—脳、身體
などをめぐって— 佐藤 實

四月二五日 北周の庾信と南北朝末の園林につ
いて 外村 中

六月二七日 馬王堆漢墓出土「五十二病方」に
おける呪術的治療の一側面—「唾」

「嘔」による治療の意味—

坂出 祥伸

七月一日 江戸時代の養蠶と絹織物

相川佳予子

九月二六日 中国建築の知識は如何なる媒體を
通じて日本に伝えられたか—スラ
イド併映— 田中 淡

十月二四日 廣東出土の漢・魏・晉時代の水田
模型について—スライド併映—

渡部 武

中国の禮制と禮學

班長 小南一郎

本研究班は、五年計画の最終年度となった。前年度に引き続き、続漢書禮儀志に記述される、漢代宮廷の年中行事を読んで、訳注を付ける作業を行なったが、秋の行事に関する部分まで読み進んだところで研究班の期限が終わった。この五年間の研究成果を公表するため、『中国の禮制と禮學』の題で、二〇〇一年春に、報告書が出版される予定である。

中国文明の形成

班長 小南一郎

本研究班は、最近の新しい考古資料や出土文献資料を通して、中国文明がどのように形成されたのかを検討すべく、五年計画で、本年四月に始まったものである。中国文明が一応の完成したかたちを取るものが漢代だとして、それ以前の、中国文明の形成過程についてのべる文献資料がすでに多数存在しており、そうした文献資料と出土文物資料とをいかに結びつけるかという方法論への反省が、中国文明の形成を考えようとする場合、きわめて重要なものとなる。これら二種類の資料を結合させて大きな成果を挙げた学者として、王国維の名を挙げることができる。本研究班では、王国維の『觀堂集林』を会読して、かれの方法論を検討し、我々自身の方法論にも反省を加えようとする。会読と平行して、次のような研究報告が行われた。

十月三十一日 三閭大夫考 — 兼論楚国公族の
興衰 李零（北京大学）

十一月二十八日 洛陽の西周遺跡

飯島武次（駒沢大学）

三教交渉の研究

班長 麥谷 邦夫

本研究班は、中國中世における儒佛道三教間のかかはりをさまざまな角度から研究することを目的に、二〇〇〇年度から五年間の豫定で組織された。初年度は、「唐代宗教の研究」班において読み切れなかった唐・神清『北山録』の巻八以降を讀了することを目指し、巻八、九の二巻を讀了して巻一〇にとりかかったところである。

三国時代の出土文字資料

班長 井波陵一、富谷 至

研究初年次の本年は、最近公刊されたばかりの木簡資料——三国・呉の時代の「走樓簡」——を取り上げ、これを古文書学的な手法によって検討した。班員の関心は、主に、その書式の問題に集中した。当該の資料は今後とも陸續と公刊されるはずであるから、われわれはしばらくその出版を待ちたいと思う。

また（こちらは必ずしも出土文字資料というわけではないが）、本研究所周蔵の文字拓本のうち、魏晉時代のものを選んで会読を進めている。拓本そのものは、すでに本研究所付属、漢字情報研究センターHPにおいて公開されているが、われわれはその釈文・典故の検討を行って、これもインターネット上に公開しようと考えている。

* 石刻拓本資料 <http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db/takuhon/>

中国共産主義と日本—思想・運動・戦争—

班長 狹間 直樹

現在の中国が中国共産党の支配する「共産主義」の国家としての中華人民共和国であることは、明白な事実である。中国近代史の一つの帰結としてこの中華人民共和国の誕生にいたる経過を振り返るには、二十世紀において独特の歴史現象として出現した世界の共産主義との関連でとらえねばならぬことは言うまでもないとして、そのさい東アジアにおける日本（朝鮮を含め）との密接なかかわりの探求がとりわけ必要とされるのである。本研究は、中国共産主義のありようを日本との関連において、思想・運動・戦争の諸側面から迫ろうとするものである。

一月二八日 我的百科情結

鍾 少華

二月一八日 邦字新聞『大陸新報』の周辺 — 記者池田克己について

濱田 麻矢

三月 三日 魯迅とトロツキーおよび中国トロツキー派 長堀 祐造

五月一―二日 二〇世紀における共産主義の歴史的意義と中国での役割

狹間 直樹

五月二六日 蒋介石和上海証券物品交易所 楊 天石

六月 九日 滿鉄調査部の活動について — 「支那抗戦力調査」を中心に

江田 憲治

六月二―三日 延安整風運動の再検討 — 高華『赤い太陽はどうやって昇ったか』を手掛かりに 緒方 康

一〇月 六日 賀川豊彦と孫文 浜田 直也

一〇月二〇日 魯迅とマルクス主義 山田 敬三

一―月一―〇日 革命と抗日 — 韋君宜の場合 楠原 俊代

一―月二―四日 中共創立期文書 — イルクーツク、東京、広州 石川 禎浩

一―月 八日 中共在上海都市政治活動空間初探（一九二一―一九二七年）

羅 蘇文

中国近代化の動態構造

班長 森 時彦

近代における中國文明と西洋文明の接觸が中國の社會構造にいかなる變動をもたらしたかという問題を、政治・經濟・文化などさまざまな専門分野から多角的に考察することが、このプロジェクトの課題である。本年度も、これまでどおり都市や農村の近代化を扱った発表が多くを占め、政治、思想、文学や對外關係などバラエティに富んだ発表も行なわれ、より幅広い視野から中国の近代化について議論できた。

一月二―日 構造化された近代蘇北農村の復権 弁納 オ―

二月 四日 市場圏社會論の地域性——成都東郊農村のフィールド調査より

小島 泰雄

人 文 学 報

四月二八日	中国近代啓蒙運動的反思与超越— 以五四新文化運動為中心	張 利民	五月二三日	『混一疆理歴代国都之図』につい て	杉山 正明
四月二八日	中国綿業近代化の動態構造	森 時彦	五月二七日	元曲「趙元遇上皇」第二折前半	井上 泰山
五月一九日	民国呉県の田賦徴収機構	高嶋 航	六月 六日	「刑法類」五刑から放火	古松 崇志
六月 二日	上海「親日」作家と日本	濱田 麻矢	六月二〇日	「刑法類」毆害から戸絶承継	桜井 智子
六月一六日	北洋海軍と清朝財政	細見 和弘	七月 四日	宋代資料中の高麗関係記事	張 東翼
六月三〇日	近代中国と孔教運動	森 紀子	七月 八日	元曲「趙元遇上皇」第二折後半	小松 謙
九月二九日	共和党新政権の誕生と朝鮮戦争	吹戸 真実	七月二八日	元曲「趙元遇上皇」第三折前半	高橋 繁樹
一〇月一三日	三〇年代における中国共産党の労 働運動	江田 憲治	八月 三日	元曲「趙元遇上皇」第三折後半	高橋 文治
一〇月二七日	清末の外銷款項について	岩井 茂樹	九月一六日	元曲「趙元遇上皇」第四折	竹内 誠・松浦 恒雄
一一月一七日	中華人民共和国における回想録作 成の現場 — 増減する中共“一大” 代表	石川 禎浩	九月一九日	「刑法類」毆害から戸絶承継（続）	桜井 智美
一二月 一日	和平・反共・建国の源流：周仏海 と陳公博	柴田 哲雄	一〇月 三日	「刑法類」官員公服品級から禁断 紅門	金 文京
			一〇月一七日	「公理類」前半	谷井 陽子
			一〇月二八日	元曲「陳搏高臥」第一折	赤松 紀彦・井上 泰山
			一一月 七日	「公理類」後半	加藤 雄三
			一一月二一日	和刻本『事林広記』辛集卷十「詞 状新式上」	水越 知
			一一月二七日	東アジア地中海と航海技術	金 健人
			一二月 五日	「算法類」	武田 時昌
			一二月二七日	元曲「陳搏高臥」第二折前半	金 文京
元代の社会と文化			班長 金 文京		
本研究班は、元代の類書『事林広記』と元曲のもつとも古いテキストである『元刊雜劇三十種』の読解と訳注作成、およびそれに関連する元代の社会、文化諸方面の研究を目的として、二〇〇〇年度から三年間の予定で組織された。『事林広記』は至順刊本（内閣文庫蔵）を底本として諸本を校合し、本年度は、刑法類（別集卷三）、公理類（別集卷四）および算法類（別集卷後）の一部を読み、併せて関連する研究発表を行った。『元刊雜劇三十種』については、「趙元遇上皇」雜劇および「陳搏高臥」雜劇の一部を読み、訳注を作成した。					
四月一八日	『事林広記』の諸本とその関係	森田 憲司	中国近世社会の秩序形成		
五月 二日	『事林広記』の編者、陳元佳につ いて	金 文京	班長 岩井 茂樹		
五月一三日	元曲「趙元遇上皇」第一折	金 文京	秩序形成の場はさまざまである。私人間でとりかわされる明示的あるいは暗黙のとり決めにせよ、統治機構の権力行為とそれに対する被統治者の側からの反応にせよ、およそ社会的な行為はつねにさまざまな秩序を生みだしつつけている。制度化された既存の秩序も、人びとがそれを受け入れ、それに遵っ		

て行動するという再確認の行為によって支えられているわけである。伝統的な中国社会は、帝国規模の巨大な官僚機構によって管理される専制支配のもとにあったという通念は今日なお根強いのであるが、その同じ社会は「散砂」のごとしとも言われた。社会という複雑かつ巨大なものを対象として掲げるのは、はなはだ無謀ではあるが、支配とそれにたいする反抗という二項対立の枠組みではなく、人びとの行為と認識が安定した秩序にむかって収斂したり、既存の秩序への不同意によってそれを発散させたりする多様な場を、集積と相互連関という位相において捉えることをつうじて、中国社会の歴史的な形成についての理解を深めようというのが、本研究班のねらいである。初年度である今年は、左記のような研究発表をおこなった。

- 五月一〇日 清代土地課税における合理性
岩井 茂樹
- 五月二四日 元代河東塩池神廟碑 — 史料紹介とその初歩的検討 —
古松 崇志
- 六月 七日 帝政後期中国社会秩序における暴力問題 — 明代中期京畿地方の盗賊問題を事例として —
ロビンソン
- 六月二一日 実徴冊と徴税 高嶋 航
- 七月 五日 清代大計制度の変遷 小野 達也
- 九月 六日 明代における朝貢 — 琉球の事例を中心に — 岡本 弘道
- 九月二〇日 捐納と印結との関係について
伍 躍
- 一〇月 四日 清代の胥吏缺取引について
加藤 雄三
- 一〇月一一日 清朝治下のオロチョンニル編成について — ブトハ問題とニル根源冊をめぐって — 承 志
- 一〇月一八日 元代江南出身者の任用をめぐって
櫻井 智美
- 一一月 一日 清前期四川の招民開墾政策の展開
朴 玖澈
- 一一月一五日 清代加給考 — 中國官僚制の一側面
大野 晃嗣

- 一一月二九日 清代禮學の状況 鄭 台燮
- 一二月一三日 明末の書畫骨董の蒐集をめぐる状況 — 汪何玉『珊瑚網』について —
井上 充幸

唐代宗教の研究

班長 吉川 忠夫

四年間にわたる共同研究を終え、成果報告論文集として、吉川忠夫編『唐代の宗教』(朋友書店 2000年7月)を刊行した。なお『北山録』の解説は、「三教交渉の研究」班において継続する。

文献と情報

班長 勝村 哲也

七年間にわたる共同研究を終え、研究成果報告としての班員の論文を『東方学報』本冊に収録した。

客員研究部

植民地主義と人類学

班長 山路 勝彦

近代の西欧諸国が生み出し、また日本も世界史の流れの中でその一翼を担った植民地主義は、「未開社会」を「文明化」させていく一方で、地球上の随所で、様々な社会・文化変化をもたらした。そればかりか、その植民地主義は、現在においても「多文化主義」、「エスニシティ」、「エスノ・ナショナリズム」などの概念でくれる社会問題と深い関係がある。人類学の観点から、そして学問としての人類学との関わりから、植民地主義について研究をする。最後は成果刊行を念頭にまとめる報告で議論を心懸けた。

- 班員 小牧幸代 田中雅一 竹沢泰子 水野直樹
安田敏郎 山室信一(以上人文研) 松田素二(文学部) 田辺明生(アジア・アフリカ地域研究科)
李仁子(民博COE) 上杉妙子(民族学振興会)
荻野昌弘(関西学院大) 岡田浩樹(甲子園大)
春日直樹(大阪大) 金谷美和(人文研研修員) 川村清志(学振・特別研究員) 窪田幸子(広島大)
栗本英世(民博) 小林致広(神戸市外大) 常田夕実子(学振・特別研究員) 富山一郎(大阪大) 中谷純江(学振・特別研究員) 福浦厚子(滋賀大)
細谷広美(京都文教大) 元木淳子(法政大) 森木和美(薫英女子大・非) 脇村孝平(大阪市大) 池

亀彩（人環・院）石井美保（人環・院）岩谷彩（人環・院） 努力するつもりである。

1月17日 植民地の記憶の社会学 ― 日本人にとつての「満洲」経験

坂部 晶子（文学部院）

インド手工芸の『発見』 ― クーマラスワミとカマラデヴィ

金谷 美和

1月31日 ペルーにおけるインディオ像 ― 農民（カンベシーノ）とインカの末裔の間で

細谷 広美

アフリカ人女性作家と植民地主義 ― カリクスト・ベヤラを中心に

元木 敦子

2月21日 韓国仏教の屈折 ― 妻帯僧問題に現れるジェンダーとポストコロニアリズム

岡田 浩樹

軍事・地政的欲望と「歴史の収奪」
沖縄占領統治と初期民主化運動をめぐって

石原 俊（文学部院）

3月6日 グアテマラのマヤ運動と国内植民地論

小林 致広

カリブ海地域の植民地主義と文化人類学
石塚 道子（お茶の水大）

『帰真総義』の研究

班長 濱田 正美

漢語で記されたイスラーム文献は、中国学からもイスラーム学の側からも長らく等閑に付されてきた感があるが、近年その研究は急速に進展し始めた。本研究班は、明末の南京に滞在したインド出身のフーフィーの口述を、その弟子の張中なる人物が筆録した『帰真総義』の読解を通じて、「漢語によって言表されたイスラーム神秘主義思想」を解明することを目的とする。班長の海外出張のため、夏休み前には二回の研究会を持ち得たのみであったが、秋以降は9月21日、10月19日、11月2日、12月7日に研究会を行い、濱田正美、岩井茂樹、武田時昌、池田巧が訳と注釈を準備の上、会読を行った。だいたい四分の一を読了したが、引用されているペルシア語文献の比定など今後検討せねばならぬ問題も多い。新年度には、研究会の隔週開催をより確実にすべく

Ⅱ 個人研究

人文学研究部

知識と社会制度

阪上 孝

一九世紀における明治維新

佐々木 克

「日本植民地帝国」の経済史的研究

山本 有造

シュメール行政・経済文書の研究

前川 和也

古代インド・ヴェーダ祭式の構造と歴史的展開の研究

井狩 彌介

フランスの詩学

宇佐美 齊

前近代日本の文明史的研究

横山 俊夫

近代東アジアにおける日本の法と政治

山室 信一

フランス革命と近代的主体の成立

富永 茂樹

近代朝鮮の政治と社会

水野 直樹

南アジアの宗教と社会

田中 雅一

文学理論の研究

大浦 康介

戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク

籠谷 直人

後期ヴェーダ文献の成立史研究

― ブラーフマナからウパニシャッドへ ―

藤井 正人

近代天皇制の文化史的研究

高木 博志

初期近代ポーランドの政治文化

小山 哲

人種・エスニシティ論

竹沢 泰子

近代日本の芸術と西洋

高階絵里加

士族の研究

落合 弘樹

フランクフルト学派の政治思想

上野 成利

ドイツ国家学と近代日本

瀧井 一博

近代日本の言語政策

安田 敏朗

共和国の法と道徳 ― フランス第三共和政期における共和思想と新カント派 ―

北垣 徹

江戸時代天文暦学の文化史的研究

小林 博行

ポール・ヴァレリーと二〇世紀フランスの思想

森本 淳生

南アジア・ムスリム社会の社会構造

小牧 幸代

近代日本民俗誌システムの研究

菊地 暁

東方学研究部

中国近代社会思想研究 狭間 直樹
南アジア亜大陸北西地方の歴史考古学研究

桑山 正進
中国古代の伝承文化研究 小南 一郎
中国美術の様式と意味 曾布川 寛
中国建築の様式・技術・空間 田中 淡
近代中国の綿紡織業 森 時彦
道教思想研究 麥谷 邦夫
敦煌写本の言語史的研究 高田 時雄
中国古代中世の法制 富谷 至
中国の小説、演劇及び講唱文学の演变 金 文京
清代の文化と社会 井波 陵一
先秦時代の金文 浅原 達郎
中国科学の基礎理論 武田 時昌
古代中国の考古学研究 岡村 秀典
近世中国の財政と社会 岩井 茂樹
川西走廊の漢藏諸語の記述言語学的研究

池田 巧
インド・中国における仏教の学術と実践
船山 徹
文字コード理論 安岡 孝一
中国中世学術史の研究 木島 史雄
中国小学史 森賀 一恵
前近代朝鮮の政治制度と社会制度 矢木 毅
ムガル朝時代の歴史叙述の研究 真下 裕之
中国近代の社会・文化構造 高嶋 航
中国隋唐期における疾病認識―『諸病原候論』を軸に― 東郷 俊宏
魏晋南北朝時代の注釈学 古勝 隆一
中国近世の国家支配の研究 古松 崇志
中国仏教絵画の研究 大原 嘉豊
客家語音韻史 中西 裕樹
文字定義情報に基づく文書表現系に関する研究 守岡 知彦

事業概況

夏期公開講座

2000年7月 於 本館大会議室

―人種・民族・階級―

7日 「人種」は存在するか―文化人類学から語り直す―

竹沢 泰子

西南中国の民族と言語―社会言語学の視点から―

池田 巧

8日 故郷でインドを想い眠る―前近代におけるインドとイスラーム世界の人的交流―

真下 裕之

インドのイスラーム教徒とカースト制度

―身分の高い「民族」と低い「民族」の分類をめぐる―

小牧 幸代

開所七一周年記念公開講演会

2000年11月16日

於 本館大会議室

簾簾の名物學

木島 史雄

祭式と輪廻―古代インド再生説の展開―

藤井 正人

元曲「盆児鬼」考―しゃべるお碗の話―

金 文京

所員動静

・吉川忠夫（東方部）教授は、停年により退職（3月31日付）、花園大学客員教授に就任（4月1日付）。

・荒牧典俊（東方部）教授は、停年により退職（3月31日付）、大谷大学教授に就任（4月1日付）。

・勝村哲也（附属東洋学文献センター）教授は、停年により退職（3月31日付）、島根県立大学教授に就任（4月2日付）。

・高田京比子（西洋部）助手は、神戸大学文学部助教授に昇任（四月一日付）。

・桑山正進（東方学研究部）教授を、附属漢字情報研究センター長に併任（4月1日～2001年10月31日）。

・濱田正美神戸大学文学部教授は、併任教授（文化

- 研究創成研究部門、4月1日～2001年3月31日)。
- ・中谷文美岡山大学文学部助教授は、併任助教授(文化研究創成研究部門、4月1日～2001年3月31日)。
 - ・富永茂樹(西洋部)助教授は、当研究所(人文学研究部)教授に昇任(4月1日付)。
 - ・金文京(東方部)助教授は、当研究所(東方学研究部)教授に昇任(4月1日付)。
 - ・富谷至(東方部)助教授は、当研究所(東方学研究部)教授に昇任(4月1日付)。
 - ・水野直樹(日本部)助教授は、当研究所(人文学研究部)教授に昇任(4月1日付)。
 - ・井波陵一(附属東洋学文献研究センター)助教授は、当研究所(附属漢字情報研究センター)教授に昇任(4月1日付)。
 - ・武田時昌(東方部)助教授は、当研究所(附属漢字情報研究センター)教授に昇任(4月1日付)。
 - ・船山徹九州大学文学部助教授は、当研究所(東方学研究部)助教授に昇任(4月1日付)。
 - ・安岡孝一大型計算機センター助教授は、当研究所(附属漢字情報研究センター)助教授に配置換(4月1日付)。
 - ・高階絵里加氏を、助教授(人文学研究部)に採用(4月1日付)。
 - ・守岡知彦氏を、助手(附属漢字情報研究センター)に採用(4月1日付)。
 - ・大原嘉豊氏を、助手(東方学研究部)に採用(4月1日付)。
 - ・中西裕樹氏を、助手(東方学研究部)に採用(4月1日付)。
 - ・大浦康介助教授(人文学研究部)は、文部省科学研究費補助金により、平成11年12月25日大阪発、フランス国立図書館、C N R S、パリ第8大学に於いてアヴァンギャルド芸術に関する資料収集を行い、1月10日帰国。
 - ・宇佐美齊教授(人文学研究部)は、文部省科学研究費補助金により、1月2日大阪発、パリ第4大学、フランス国立図書館に於いてアヴァンギャルド芸術の研究に関わる調査及び資料収集を行い、1月15日帰国。
 - ・勝村哲也教授(附属東洋学文献センター)は、1月10日大阪発、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、カリフォルニア大学パークレイ校、サンフランシスコ市立大学リッチー研究所に於いて漢籍・朝鮮本の調査を行い、1月21日帰国。
 - ・金文京教授(東方学研究部)は、平成11年9月23日大阪発、台湾大学文学院中国文学系に於いて中国の小説、演劇及び講唱文学の演変に関する研究及び講演を行い、1月28日帰国。
 - ・勝村哲也教授(附属東洋学文献センター)は、在外研究員旅費により、1月27日大阪発、国立国語研究所(大韓民国)に於いて韓国語文献処理に関する日韓共同ワークショップを開催し、1月30日帰国。
 - ・横山俊夫教授(人文学研究部)は、在外研究員旅費により、1月27日大阪発、国立国語研究所(大韓民国)に於いて韓国語文献処理に関する日韓共同ワークショップを開催し、1月30日帰国。
 - ・池田巧助教授(東方学研究部)は、文部省科学研究費補助金により、1月25日大阪発、香港城市大学、澳門大学、中国チベット学研究センター、社会科学院民族研究所、中央民族大学に於いてチベット系少数民族言語に関する資料収集およびマカオの言語保存運動についての資料収集を行い、2月4日帰国。
 - ・富永茂樹教授(人文学研究部)は、文部省科学研究費補助金により、1月28日大阪発、社会科学高等研究院(フランス)、フランス国立図書館に於いて1789年人権宣言成立過程の研究にかかわる打合せおよび資料収集を行い、2月11日帰国。
 - ・高嶋航助手(東方学研究部)は、文部省科学研究費補助金により、2月16日大阪発、上海図書館、蘇州大学、蘇州図書館に於いて中国近代土地・徴税制度関係の資料収集を行い、2月26日帰国。
 - ・田中淡教授(東方学研究部)は、3月1日大阪発、大明宮含元殿遺跡(中華人民共和国)に於いて同遺跡保存修復専門家会議に出席し、3月4日帰国。
 - ・岡村秀典助教授(東方学研究部)は、文部省科学研究費補助金により、2月28日大阪発、夏県東陰遺跡、陝西歴史博物館、浙江省博物館、上海博物館に於いて都市遺跡の調査を行い、3月10日帰国。
 - ・勝村哲也教授(附属東洋学文献センター)は、文

部省科学研究費補助金により、3月10日成田発、カリフォルニア大学バークレー校・サンディエゴ校、サンフランシスコ市立大学に於いて朝鮮本漢籍の調査とデジタルネットワーク構築協議を行い、3月15日帰国。

- ・金文京教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、3月14日大阪発、ソウル大学に於いて奎章閣所蔵の資料調査を行い、3月18日帰国。
- ・麥谷邦夫教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、3月11日大阪発、上海社会科学院、茅山、泰山、北京大学に於いて衛星画像を利用した中国宗教地理学構築の試みに関する現地調査を行い、3月24日帰国。
- ・籠谷直人助教授（人文学研究部）は、3月17日大阪発、ロンドン大学、国立公文書館に於いて1930年～50年代のアジア国際秩序についての予備会議および日本－インドの綿業通商摩擦交渉記録の閲覧を行い、3月31日帰国。
- ・東郷俊宏助手（東方学研究部）は、3月20日大阪発、崑崙飯店に於いて老中医臨床実技の記録・調査を行い、北京中医薬大学、北京中医研究院に於いてチベット医学史研究の打ち合わせを行い、3月30日帰国。
- ・水野直樹教授（人文学研究部）は、3月5日成田発、ロシア国立社会・政治史文書館に於いて朝鮮関係文書の資料調査を行い、4月2日帰国。
- ・高田時雄教授（東方学研究部）は、委任経理金により、4月1日大阪発、香港大学、マカオ文書に於いて16・17世紀アジアの言語接触に関する資料収集を行い、4月6日帰国。
- ・真下裕之助手（東方学研究部）は、委任経理金により、4月1日大阪発、香港大学、マカオ文書に於いて16・17世紀アジアの言語接触に関する資料収集を行い、4月6日帰国。
- ・竹沢泰子助教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、4月13日成田発、ワシントン大学、カリフォルニア大学バークレー校に於いて社会的構築物としての人種概念に関する理論的考察に関する資料収集を行い、4月25日帰国。
- ・高木博志助教授（人文学研究部）は、5月17日大

阪発、新陽パークホテル、求禮韓国通信研修院に於いて第四回「東アジア平和と人権」国際シンポジウムに参加、討議および司会を行い、5月21日帰国。

- ・金文京教授（東方学研究部）は、5月14日大阪発、復旦大学、南京大学に於いて明清文学と性別国際学術討論会に出席および論文発表を行い、5月22日帰国。
- ・井狩彌介教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、5月21日大阪発、ハーバード大学に於いてヴェーダ・ヴァーダウラ学派文献に関する共同研究および講演を行い、5月29日帰国。
- ・瀧井一博助手（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、5月30日大阪発、ウィーン大学法制史研究所、オーストリア国立図書館、ケルン大学に於いて明治期お雇い外国人法律家に関する研究打合せおよび関係資料調査、前ドイツ国外務参事官バルトホルトヴィッチ博士邸、ハンブルク市立図書館に於いてお雇い外国人カール・ラートゲン関係資料の調査を行い、6月13日帰国。
- ・高田時雄教授（東方学研究部）は、委任経理金により、6月21日大阪発、首都師範大学、北京図書館に於いて16・17世紀アジアの言語接触に関する資料収集、敦煌藏経洞発見一百年記念国際学術会に議に出席し、6月25日帰国。
- ・スタファン ローゼン外国人研究員は、7月19日大阪発、檀国大学（大韓民国）に於いて韓国史に関する研究打合せ及び資料蒐集を行い、7月26日帰国。
- ・高木博志助教授（人文学研究部）は、8月2日大阪発、上海国際問題研究所、上海社会科学院、复旦大学日本研究所、上海博物館に於いて上海からみた日本の「アイデンティティ」と「文化」をめぐる研究を行い、8月5日帰国。
- ・田中雅一助教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、8月4日大阪発、アムステルダム大学、大英図書館、エジンバラ大学に於いて南インドのジェンダーについての資料収集を行い、8月16日帰国。
- ・金文京（東方学研究部）は、文部省科学研究費補

- 助金により、8月9日大阪発、北京大学に於いて明清戯曲小説についての研究打合せ及び資料収集、恩州市文化局に於いて宋代戯曲資料の収集、上海図書館に於いて明清小説についての資料収集を行い、8月17日帰国。
- ・高木博志助教授（人文学研究部）は、8月21日大阪発、故宫博物院に於いて近代国家と民衆統合の研究に関する資料調査、台北市内の寺院に於いて「忠烈祠」の調査、台湾中央研究院近代史研究所に於いて近代国家と民衆統合の研究に関する資料調査を行い、8月24日帰国。
 - ・前川和也教授（人文学研究部）は、7月17日大阪発、大英博物館に於いてシュメール行政・経済文書の研究を行い、8月26日帰国。
 - ・中西裕樹助手（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、7月27日大阪発、海豊県誌弁公室に於いてショー語の調査及び資料収集、香港中文大学、香港城市大学に於いて中国における言語接触に関する資料収集を行い、8月26日帰国。
 - ・森本淳生助手（人文学研究部）は、京都大学後援会助成金により、1999年11月1日大阪発、近現代テキスト草稿研究所（フランス）に於いてポール・ヴァレリーと同時代思想に関する研究を行い、2000年8月31日帰国。
 - ・池田巧助教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、7月26日大阪発、香港城市科技大学、四川大学西南民族学院、康定県文化局、道孚県文化局に於いてチベット系少数民族言語の記述調査を行い、9月1日帰国。
 - ・曾布川寛教授（東方学研究部）は、8月27日大阪発、上海博物館に於いて中国美術の調査及び資料蒐集を行い、9月1日帰国。
 - ・上野成利助手（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、8月28日大阪発、ロンドン大学図書館、ドイツ国立図書館に於いて20世紀前半における「脱近代」論に関する文献資料の調査収集を行い、9月6日帰国。
 - ・船山徹助教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、8月25日大阪発、モントリオール・コンヴェンション・センターに於いて第三六回国際アジア・北アフリカ研究会議に出席し論文発表を行い、9月5日帰国。
 - ・大浦康介助教授（人文学研究部）は、7月13日大阪発、オーベルヴィリエ劇場（フランス）に於いて日・中・仏演劇プロジェクトへ参加し、アヴィニョン市内演劇祭会場に於いてアヴィニョン演劇祭に出席し、フランス国立図書館に於いてアヴァンギャルド芸術の研究に関する資料収集を行い、9月5日帰国。
 - ・田中淡教授（東方学研究部）は、9月5日大阪発、台湾中央研究院に於いて「植民地支配下のアジアの都市と建築の歴史」国際シンポジウムに出席し、9月8日帰国。
 - ・狭間直樹教授（東方学研究部）は、9月5日大阪発、中国社会科学院近代史研究所に於いて「近代中国と世界」に関する国際シンポジウム出席及び資料蒐集、研究打合せを行い、9月12日帰国。
 - ・森時彦教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、9月8日大阪発、中国社会科学院近代史研究所に於いて中国近代の人口動態に関する研究打合せ、北京図書館及び北京大学に於いて中国近代の人口動態に関する研究打合せ及び資料蒐集を行い、9月15日帰国。
 - ・水野直樹教授（人文学研究部）は、9月5日大阪発、ロシア国立社会政治史文書館に於いて朝鮮関係コミンテルン文書の調査を行い、9月17日帰国。
 - ・瀧井一博助手（人文学研究部）は、9月5日大阪発、ウィーン大学法学部法制史研究所に於いて19世紀ドイツ法学の日本イメージについての研究打合せ、ライプチヒ民族学博物館に於いて明治期お雇い教授カール・ラートゲン収集日本コレクションの調査、イエナ大学に於いて第33回ドイツ法史学者大会出席、オーストリア国立図書館に於いて19世紀ドイツ語圏新聞から日本関連の記事の調査を行い、9月19日帰国。
 - ・富谷至教授（東方学研究部）は、9月16日大阪発、西安市内に於いて漢代陵墓等石刻調査、西安大学に於いて石刻に関する研究打合せを行い、9月19日帰国。
 - ・麥谷邦夫教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、10月5日大阪発、四川大学に於いて洪雅県瓦屋山一帯の実地調査、香港道教寺

院等に於いて道教関係資料調査を行い、10月16日帰国。

- ・小南一郎教授（東方学研究部）は、10月19日大阪発、プリンストン大学に於いて「Text and Ritual in Early China」に関する研究会に出席し発表して、10月24日帰国。
- ・高田時雄教授（東方学研究部）は、在外研究員旅費により、10月31日大阪発、台湾中央研究院資訊研究所・近代史研究所、中華仏学研究所に於いて東洋学文献類目入力フォーマット開発についての研究打合せを行い、11月4日帰国。
- ・森時彦教授（東方学研究部）は、在外研究員旅費により、10月31日大阪発、台湾中央研究院資訊研究所・近代史研究所、中華仏学研究所に於いて東洋学文献類目入力フォーマット開発についての研究打合せを行い、11月4日帰国。
- ・安岡孝一助教授（東方学研究部）は、在外研究員旅費により、10月31日大阪発、台湾中央研究院資訊研究所・近代史研究所、中華仏学研究所に於いて東洋学文献類目入力フォーマット開発についての研究打合せを行い、11月4日帰国。
- ・岡村秀典助教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、11月1日大阪発、北京大学に於いて中国古代玉器の調査と研究を行い、11月7日帰国。
- ・北垣徹助手（人文学研究部）は、1999年11月17日大阪発、社会科学高等研究院レイモン・アロン政治研究センター（フランス）、フランス国立図書館に於いて第三共和政初期の共和思想と道德科学の関係についての研究を行い、11月16日帰国。
- ・小南一郎教授（東方学研究部）は、11月15日大阪発、台湾中央研究院文学哲学研究所に於いて「空間、地域と文化—中国文学と文化書写」学術検討会に出席し発表して、11月19日帰国。
- ・竹沢泰子助教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、11月13日成田発、カリフォルニア大学バークレー校に於いて社会進化論に関する資料収集、サンフランシスコヒルトンホテルに於いて国際人類学民族学会議の打合せを行い、11月20日帰国。
- ・曾布川寛教授（東方学研究部）は、11月18日大阪

発、青島市博物館、青州市博物館、山東省博物館、兵馬俑博物館、南京博物館、上海博物館に於いて中国美術の調査及び資料蒐集を行い、11月30日帰国。

- ・金文京教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、11月28日大阪発、ソウル大学奎章文庫及び総合図書館、慶北大学図書館に於いて中国近世小説資料の調査を行い、12月3日帰国。
- ・真下裕之助手（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、11月28日大阪発、大英図書館に於いてチャガタイ・トルコ語、ペルシア語文献の諸写本研究を行い、12月8日帰国。
- ・富谷至教授（東方学研究部）は、12月7日大阪発、忠北大学校に於いて特別講演会講演、慶北大学に於いて「中国史における法と習慣」に関する発表を行い、12月10日帰国。
- ・山本有造教授（人文学研究部）は、12月5日大阪発、台湾中央研究院近代史研究所、台中省文献委員会、台湾市立図書館、高雄市歴史博物館、阿美文化村に於いて講演及び植民地期台湾に関する資料調査を行い、12月14日帰国。
- ・山室信一教授（人文学研究部）は、12月5日大阪発、台湾中央研究院、台中省文献委員会、台湾市立図書館、高雄市歴史博物館、阿美文化村に於いて講演及び国民帝国・日本の法的構成に関する史料調査を行い、12月14日帰国。
- ・小山哲助教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、12月3日大阪発、ワルシャワ国立図書館に於いて貴族共和制期ポーランドにおける国制改革論の系譜に関する資料調査を行い、12月16日帰国。
- ・富永茂樹教授（人文学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、12月7日大阪発、社会科学高等研究院（フランス）に於いて「民主政の理論と実践」に関するセミナー出席及び資料収集を行い、12月17日帰国。
- ・高田時雄教授（東方学研究部）は、文部省科学研究費補助金により、12月12日大阪発、ローマ大学、ローマ国立中央図書館に於いて南欧所在中国学資料の調査研究を行い、12月20日帰国。
- ・金文京教授（東方学研究部）は、12月14日大阪発、

高麗大学に於いて第1回韓国学ワークショップに出席、高麗大学図書館に於いて元史関係資料収集、誠庵古書博物館に於いて仏教関係資料調査を行い、12月20日帰国。

外国人研究員

- Staffan Rosén ストックホルム大学教授
シルクロードにおける日本と韓国
(文化生成研究客員部門)
受入教官 富谷教授
期間 2月5日～8月31日
- 張 啓雄 台湾中央研究院近代史研究所研究員
19世紀後半における東アジア国際秩序
(文化連関研究客員部門)
受入教官 籠谷助教授
期間 5月15日～8月20日
- Louise Young ニューヨーク大学歴史学部
助教授
満州国における日本人の文化活動
(文化連関研究客員部門)
受入教官 山室教授
期間 9月1日～11月30日
- Marcel Hénaff カリフォルニア大学サン・
ディエゴ校教授
都市および公共空間の比較史
(文化生成研究客員部門)
受入教官 富永教授
期間 10月23日～2001年6月30日

招へい外国人学者

- John Allen Tucker ノース・フロリダ大学
歴史・哲学宗教学部準教授
荻生酢徂徠『辨名』の研究 受入教官 横山教授
期間 1月12日～7月20日
- 何 双全 甘肅省文物考古研究所研究員教授
辺境出土木簡の研究 受入教官 富谷教授
期間 2月25日～12月24日

- Giovanni Verardi ナポリ東洋大学アジア学部
教授
インド・中央アジアにおける佛教衰退に関する歴史考古的研究 受入教官 桑山教授
期間 3月1日～3月30日
- James Moore Oliver オランダライデン大学中国学研究所講師
唐代科举制度の研究 受入教官 富谷教授
期間 3月25日～4月30日
- Gillian Gaye Rowley ウェールズ大学日本
研究センター元講師現在著述業
中院仲子の伝記的研究 受入教官 横山教授
期間 4月1日～2001年3月31日
- Antony Best ロンドン大学国際関係史学部講
師
アジア太平洋戦争の起源についての研究 受入教官 籠谷助教授
期間 5月1日～6月30日
- Thomas James Harper ロンドン大学東洋
アフリカ学院上級研究院
赤穂浪士在京関連資料の調査 受入教官 横山教授
期間 5月1日～2001年3月31日
- Jean Rault ルーアン美術学校教授
庭園様式の日仏比較研究及び写真撮影 受入教官 富永教授
期間 7月11日～9月30日
- Harvie Ferguson グラスゴー大学助教授
近代人の自己理解と心理学の展開の研究 受入教官 富永教授
期間 9月1日～9月25日
- 文 竣暎 ソウル大学校「21世紀の世界の中の
韓国法の発展」教育研究団助教
植民地期朝鮮の刑事政策に関する研究 受入教官 水野教授
期間 9月20日～2001年9月19日
- 李 鍾日文 延世大学校社会発展研究所専門研
究員
朝鮮総督府の犯罪統制に関する研究 受入教官 水野教授
期間 12月25日～2001年12月24日

外国人研究生

• Sonya Lee

東アジアにおける仏教寺院の美術と歴史

受入教官 曾布川教授

期間 10月1日～2001年9月30日

出 版 物

紀要

人文学報 第83号（紀要第136冊）

2000年3月30日刊

東方学報 第72冊（紀要第137冊）

2000年3月26日刊

欧文紀要 第34号（1）（2）

2000年3月31日刊

東洋学文献類目 1997年

2000年2月26日刊

研究報告その他

北朝隋唐中国仏教思想史

荒牧 典俊編

2000年2月29日刊

唐代の宗教

吉川 忠夫編

2000年7月20日刊

それぞれの明治維新

佐々木 克編

2000年8月10日刊

所報「人文」第47号

2000年3月31日刊